

# 横浜市長選に見る 政党の役割

中田宏  
横浜市長

インタビューー 曾根泰教  
慶應義塾大学大学院政策  
メディア研究科教授



なかだ・ひろし

1964年生まれ。青山学院大学経済学部卒業。92年、日本新党旗揚げに参画。参議院議員秘書、党報道室長を経て、93年衆議院議員に初当選。2002年、横浜市長選挙に無所属で立候補、当選。4月8日、横浜市長に就任。主な著書は「国会の掟」、「行革のレンビー日本の料理法NZ風」等。



そね・やすのり

1948年生まれ。慶應義塾大学大学院法学部政治学科博士課程修了。98年から99年ハーバード大学国際問題研究所客員研究員を経て現職。著書に「決定の政治経済学」、「この政治空白の時代」共著等。

3月末に行われた横浜市長選では、元衆議院議員で無所属の中田宏氏が、現職で4選を狙う高秀信氏を破り当選した。与党3党と社民党が相乗りした現職候補が無所属候補に敗れたことは、既存政党の存在意義を改めて問う結果となった。政党はもはやその役割を終えたのか。そうでないとするれば、政党の役割をどこに見いだすべきなのか。国家レベルと地方レベルという2つの視点から激しい議論が交わされた。

## 「『横浜市現象』は時代の先取りだ」(曾根)

**曾根** まずは、今回の選挙の勝因についてどうお考えでしょうか。

**中田** 勝因は、「惰性的な組織決定」と「自発的な市民パワー」との差ではないでしょうか。高秀（秀信・前市長）さんを推薦した企業の数、労働組合の数、政党の数を足し合わせたら、だれが考えても向こうに分がある。しかし、私に言わせれば、それは「惰性の組織決定」でしかない。「組織」には、数十人規模の零細企業から数万人単位の大企業まであるけれども、そういった組織の中にいる人すべてが、高秀さんの政策や方針を理解して支援したわけではなかった。一方で、こちらの支援者それぞれは一個人でしかないけれども、その動

機たるや自発的なもの。そのような自発的な個人が、どんどん広がっていった。この差だと思います。

**曾根** なるほど。もうちょっと細かい内容をお聞きます。私が考えるに、中田さんの勝因には「青葉区現象」があったと思うんです。横浜が青葉区になったというか……。

**中田** 先生は横浜の方ですか。

**曾根** たまプラーザ（横浜市・青葉区）に、昔住んでいました。ですから、青葉区民の意識は非常によく分かります。青葉区民にとって、横浜市政は遠いところの話なんですね。区民の自覚的な意識としては、「渋谷区・世田谷区の隣に住んでいる」イメージなわけですから。逆に、横浜市にとっては「周辺」的な地域にあたる。とこ

ろが、今回の選挙では、その「周辺」の票が全体を制した。中田さんの地盤ということももちろん大きいのですが、それにしても、青葉区では中田さんに約6万票、高秀さんに約1万8000票と、決定的に差が表れました。中田さんはそういった現象をどうお考えになりますか。

**中田** 確かに曾根さんがおっしゃるような面はあるでしょう。しかし、逆にいえば、ほかの南部地域で決定的な差がついていたら勝てなかったともいえるわけです。他の地域で決定的な負け方をしていない、ほとんど均衡しているという状態があってこそ初めて勝利があったという点も見落としてはならないと思います。

**曾根** 日本の政治の変動を観察するとき、どこを最初に見るかという、かつては杉並区とか武蔵野市だったけれども、今は田園都市線沿線なんです。それこそ青葉区あたりは、意識層として次の時代を先取りしているところがあると思います。そうであるならば、青葉区は「横浜市現象」をも先取りしているはずではないかと。

**中田** そうですね。それは当たっているかもしれない。中立的でドライな政策判断・選挙選択をしているという意味では、その通りだと思います。

### 「政党が選択肢を示せば国民は反応する」 (中田)

**曾根** 「政党」という視点についてはどうでしょうか。本来ならば、民主党は中田さんを推さなければいけなかったのに、そ

うしなかった。にもかかわらず、中田さんは個人的に付き合っている方たちの応援を得て、結果的に勝利した。この事実だけを見たら、「政党」はもう先行きがないのかと考えざるを得ない。具体的に言うと、近頃の地方自治体の首長選挙では、政策・公約に無関係な「多選」「相乗り」が多く、政党が「ねじれ」てしまっているところが非常に多い。政党の存在意義が全く見えません。

**中田** 同感です。政治家や政党の使命は、選択肢をつくって有権者の前に提示することであるにもかかわらず、今回の選挙で政党はそれをサボタージュした。そこに見られるのは、国と地方の「ダブルスタンダード（二重基準）」なんです。その背景には、国と地方の制度の違いがある。議院内閣制の下で、必然的に与党と野党が発生する国政の場とは違って、地方政治には大統領型の首長・議員の選び方がある。国政の場で、鈴木宗男氏をめぐってどんなに争いが起きていても、狂牛病をめぐってどんな攻防があっても、地方議会に目をやると、そこでは「オール与党」で橋を渡っているわけです。

そういう意味で、民主党はふらついたといえふらついたんですが、それは党としての旗色というよりは、むしろ国と地方の制度の違いによるところが大きい。その証拠に、今回の選挙でも、私を応援する国会議員がいる一方で、地方議会出身の国会議員が高秀さんを応援した。そういう国と地方のダブルスタンダードが厳然としてあるところでこそ、政党とりわけ民主党は毅然

たる態度を示さないと、存在意義を失うことは間違いないと思います。今のままでは国民が政権を預けられる選択肢になり得ないですから。

**曾根** 政党が市民派や無党派に破れ去った選挙だった、という見方をする人もいるけれども、中田さんはそう考えていないということですか？

**中田** そうですね。政党がしっかりと選択肢を示せば有権者はきちんと反応するのに、政党がそれをサボタージュするから、無党派がこれだけ台頭してきているんだと思います。それは長野県も、千葉県も、ここ横浜市も同じです。政党が役割を果たしていなかったからこそ出馬した立候補者がいるんだと思いますね。地方には、最初から「4期16年でもいいではないか」という「結論」がある。結論が既に決まっているところで、多数決の手続きを繰り返しているだけなのに、それを、民主的手続きをしたから「民意」だと言ってしまう浅はかさがある。

「多選」の問題も同じです。今回の選挙では、相手陣営から逮捕者まで出る始末。なんでも役所ぐるみでやってきた、業界と役所が完全に一体化してやってきたという現実が、見事に露見したわけです。問題なのは、そういう現実を政治家サイドが承知していたということ。私を含めて、政治家たちは目の前でそういう事件を何度も見ているから、承知していて当然なんです。知っているのがわれわれ、そして、うすうす気付いているのが有権者。しかし、うすうす気付いている人たちに対して、現実を

知っているはずの政治家が行動していない。今回、私も、自分が行動しない限りは問題を眠らせたままになると思い、行動しない政党を抜けて無党派になったけれども、それは結果としての無党派なんです。政党政治というシステム自体が無意味だからではない。

### 「野党には政権を奪おうという執念が足りない」(中田)

**曾根** 青島幸男さんが当選した95年の東京都知事選でも、当時の新進党は選択肢を出さず自主投票にして、結果的には、対抗馬で自民党が推薦した石原信雄さんに乗ってしまった。中田さんがおっしゃるように、地方レベルでは、政党が絶えず選択肢を示していく努力が弱い。そのことは確かに大きな問題です。一方で、国家レベルの政党、例えば中田さんが会派を組んでいた民主党をどうお考えですか。

**中田** 9年間国会議員をやってきて、政権すなわち権力を守る側の執念深さというのを、たびたび感じさせられました。権力をもっている人間は、自分たちがもっている権力を手放すことの恐ろしさを知っている。普通の人間の生活でいえば、蛇口をひねればいくらでも飲めた水が、ある日急に、蛇口をひねっても出なくなるのに似ている。93年、自民党は細川政権に政権を譲り渡しましたから、少なくとも一度は、権力を手放す恐ろしさを実体験として学んでいるわけです。

ところが、水がふんだんに出ない生活に

慣れている人たちは、水を得ることに對してそんなに執念をもっていない。それと全く同じで、本質的な意味においても、テクニカルな意味においても、野党側に政権を取るための執念深さ、すなわち権力をひっくり返す執念深さが足りないと思います。私は民主党に何度もそのことを言ってきたつもりですが。

例えば、本質的な意味での執念深さということでは、どんなに斬られようとも、現在の自民党のあり方に対して、迎合しない政策をきちっと出し続けるべき。1、2年は斬り返されても、3、4年続ければ、やがて本当に必要な政策とは何なのか、国民に分かってもらえるチャンスがやってくるはずなんです。

一方で、テクニカルな意味での執念深さも必要です。政権をとるためには、どうしても自民党の議員を落選させなければいけない。しかし、民主党という「看板」は都市部では強くても、田舎に行ったらほとんど意味がない。むしろ、要らないくらい。では、どうしたらいいのか。保守層—何が保守、革新かという定義をし始めたら切りがないですから、いわゆる保守層の中で、現在の自民党体制ではダメだと思っている人が必ずいるわけです。民主党としては、そういう保守層の人たちが自然に同陣営に入って、自民党打倒のために協力できるような状態を作らないといけません。それに、野党サイドでは、もはや「小泉降ろし」が決定方針になってしまっているけれども、全く芸がない。小泉首相が、国民の人気を集めて自民党を壊すと宣言をしているのだ

から、野党も肩入れして徹底的に壊してもらうぐらいのしたたかさがなければいけないのに、そう成り切れない。やはり執念が劣っている。

**曾根** 僕の持論では、小泉首相の役割は不良債権の処理を早くやっておくことと、自民党を解体することなんです。自民党を消し去るのではなくて、自民党のシステム、コアになっている部分を解体する。例えば、(予算の)個所付けに関与するとか、政策の個別執行過程に圧力をかけるとか、与党審査にかけて政策をつぶすとか、そういった肝心な部分を取ってしまえば、自民党のパワーはなくなってくるはずなんです。

**中田** 長い間自民党政権が続いてきましたから、自民党というエンジンからスタートするメカニズムが日本全国津々浦々まで、既にでき上がっているんです。地域ごとの社会福祉協議会や消防団など、本当に小さな組織まで含めて、メカニズムの中に組み込まれている。従って、自民党そのものだけではなくて、自民党的メカニズム、あるいは自民党的体質を壊していくことが必要なんです。そのためには、まず選挙で—民主主義の手続き上、どうしてもこの手続を踏まないで権力を得られないから—そのメカニズムを壊さなければいけないんです。ところが、現状を見るとそれどころではない。メカニズムを壊すどころか、自民党に比べたら取り分は少ないけれども、自民党的メカニズムの中で、一緒になって恩恵を被っている野党の議員さえいる。これじゃ政権奪取なんか望めないですよ。

**曾根** 有権者サイドから見たときに、中



田さんはもともと民主党系の議員であるが、先から親しい小泉首相がバックについているというイメージが強かったと思うんですが、選挙で「小泉効果」というのはどのぐらいありましたか。

**中田** 冷静に見ると、小泉首相の影響が投票行動に直接結び付いているとは思えません。マスコミでは、私が選挙に勝ったことによって与党が窮地に陥る、小泉首相が窮地に陥るという意見が多いようです。現職市長が首相官邸に出向き、セレモニーまでやって、自民党の推薦証書を直接小泉さんから受け取り、小泉さんと握手している写真を選挙前から配りまくった。そこまでやって、しかも自民党推薦で戦って、無党派に負けたということは「小泉神通力」が落ちてきている証拠だ、そういう言い方がマスメディアの大半。

しかし、それは見方が全然逆だと思います。小泉さんを支持している層と、今回の選挙で私を支持した層は、全く同じなんです。今、小泉首相は本当に構造改革を実現できるのだろうか、疑いの目で見られていて、確かに支持率は下がってきている（注：「小泉首相は改革を実現できない」という意見が61%という調査結果が出ている・読売新聞4月23日）。でも、彼は絶対譲らないと思う。ここまでの小泉内閣は「7割内閣」といわれる通り、自民党が「分かった、これで勘弁してくれ」と言うと、最後の最後まで追い詰めないで次の課題に移ってきた。しかし、それはあくまで譲れる部分の話で、例えば郵政民営化の問題なんかでは絶対に譲らないでしょう。そうい

う「強い小泉」を国民に示す時期がくれば、支持率もきっと回復してくると思うんです。

### 「『声なき声』を大事にしていきたい」

**(中田)**

**曾根** 鈴木宗男、加藤紘一、辻元清美各代議士の問題は、選挙に影響しましたか。

**中田** 今回の事件の結果、有権者の方々には当然、既成政党に対する疑念を抱いたでしょう。そのことが、党に属しない私に期待する票につながったのは確かかもしれません。ただ、逆の影響もありました。政治に対する信頼が低下したことは、投票にすら行かないという行動にもつながっていったんです。政治というものが一定の信頼を得ているからこそ、選挙という契約が成り立つ。「選挙に行ったところでどうにもならんのだ」という政治の信頼のなさは、有権者の足を投票から遠ざける面もあるんです。私はむしろ、この問題がなければ、投票率はもう少し高かったのではないかと思います。テレビは連日、宗男さんとか辻元さんの問題ばかり取り上げて、横浜市長選なんかどこにいったか分からないような状態。日本で最大の市のリーダーを決める選挙で、かなり激しい戦いが繰り広げられていたことを知らないまま、投票日を迎えた人たちもたくさんいたことでしょう。残念なことです。

**曾根** 最後に、今後、横浜市政ではどうやって改革を進めていくのかお聞きしたいと思います。

**中田** まず、今回の選挙は「声なき声」、いわゆる「サイレント・マジョリティー」を信じた戦いだったんです。「声ある声」は、1つ残らず現職候補に推薦を出したわけですから。「声なき声」には2種類あります。1つはこれまで外で眺めてきた市民、もう1つは市役所です。例えば、企業では社長に盾突いて意見を言えば左遷されるから、やっぱり自分の社長に「辞める」と鈴を付けることはできない。その点では市役所も同じで、現状を知っていても、なかなか物申すというわけにはいかなかった。そういう意味で、横浜市の現状をよくよく知っている彼らが、私の一番のプレーンになってくれると思っています。

そのためには、やる気のある人はどんどん登用される市役所にします、と最初に宣言しようと思っているんです。マイナス査定で「ことなかれ主義」の市役所ではなく、建設的プランをもち、やる気のある人が仕事をやる。そして、それを成功させることによって、次にチャレンジしていくことが可能になると思うんです。横浜市役所には、全国から受験者が来るくらい、かなり優秀な人材が集まっているわけです。そういう優秀な人たちの知恵を生かさなない手はない。

**曾根** 全く同感です。昔、中曾根（康弘）首相が国鉄改革をやったときは、ある程度成功したんです。なぜかというと、国鉄の内部に改革する人がいたからです。松田（昌士・JR東日本会長）さんとか、井出（正敬・JR西日本会長）さんとか、あのころの内部改革者たちはみんな社長になっ

ています。一方、橋本行革の時は、残念ながら郵貯と郵政省の内部に改革する人が現れなかった。そういう前例を見ると、内部に蓄積されている知恵を使いながら改革を進めていくことは非常に重要なことだと思うんです。

1つだけ心配なのは、ちょっと若過ぎることですね。年齢が普通の人よりも10歳若いから。でも10歳若くたって、政治の経験は人より長いわけですから、頑張ってください。

**中田** 僕も若いことは短所だと思っています。でも、なんとかそれをメリットに変えていきたい。目上の方からすれば、若造はつかまえて説教してやりたいはず。しかし一方で、同世代以下である20代、30代の人たちからすれば、垣根が低く、話がしやすい存在であるはずなんです。市長としてお高くとまって垣根をつくるようなことさえなければ、若さをメリットとして生かせるのではないかと思います。

**曾根** 横浜くらい大きな市の市長となると、現実として、ある面では総理大臣よりもパワーがあるんです。パワーを持つというのは良い面と悪い面がありますが、本当のパワーを使いこなしてください。